



子どもたちに囲まれた馬場さん



授業では、学校の外に出て村中を歩き、船着き場や貯水池を見学しながら生徒たちに環境問題を考えさせる

登校するバルバコア学校の生徒たち

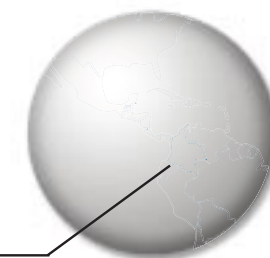


# FIELD SKETCH

## サンタ・アナ村から広がる隊員の環境教育活動

日本人ボランティアが、開発途上国で地元の人たちから何かを学んだという話はよく聞く。今回紹介する青年海外協力隊員は、現地で学んだことをもとに環境問題を提起する機会を得た。環境教育を進めるとともに、水問題を訴えて活動の場を広げる彼らの取り組みを紹介する。

文・写真 = さかくち とおる (著述家)  
text and photos by Sakaguchi Toru



コロンビア  
COLOMBIA

### 子どもたちに環境保全意識を啓発

コロンビア北部のカリブ海沿岸に位置し、人口およそ90万人を有する港湾都市カルタヘナ。16世紀に築かれた旧市街は世界遺産にも登録されており、周囲には美しい海岸が広がる国内有数の観光都市でもある。この国では全般的に、先住民とヨーロッパ人の混血メステイソが多い。しかしカリブ海沿岸地域はアフリカ人奴隷が連れて来られた歴史から、今でもカルタヘナやその周辺は黒人比率が高い。カルタヘナから20キロほど南に位置する、バルー島のサンタ・アナ村に向かう。島へ

は、コロンビアを縦断するマグダレナ川に通じる運河を定員15人ほどのボートで渡る。南西に細長く伸びるバルー島は、かつて陸続きの半島だったが、運河の建設により南米大陸本土と切り離されたため、交通の便はあまり良くない。ボートを降り、路面状態の悪い道を使い合いトラックに揺られて30分ほどで、人口数千人のサンタ・アナ村に到着した。この村の小中学生が通うバルバコア学校で、青年海外協力隊の馬場明日希<sup>あすき</sup>さんが、校内の教職員宿舎に暮らしながら、子どもたちに環境教育を指導している。さっそく校内を歩き、教室を見学させて

もらった。馬場さんの役割は、理科の授業の一部を受け持ち、各クラスで生徒の環境保全意識を啓発すること。ごみを不法投棄することどうなるのか、汚水を海に流すとどんな悪影響を及ぼすのか。子どもたちを飽きさせないためにも、学校の外に出て村中を歩き、船着き場や貯水池を見学するなどの工夫を凝らし



運河をボートで渡って乗り合いトラックでサンタ・アナ村に向かう



### 自然保護活動をする女子学生に会う

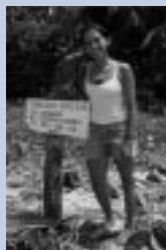
カルタヘナから250キロ西に位置する、タイロナ国立公園。この一帯は、海岸近くまで熱帯雨林が広がっており、海水浴とトレッキングが楽しめる場所だ。

拠点の町サンタ・マルタから乗ったバスの車内で、私は隣の席の若い女性に話し掛けられた。ピクトリアという名の彼女は首都ボゴタの大学生で、授業が休みのこの時期、2カ月ほどの予定で、タイロナ国立公園の自然保護ボランティアをしているという。

公園入り口前のバス停で降り、そこから1時間以上かけて、海岸まで登山道を歩いていく。その道中ピクトリアは、ウミガメの保護など自分たちの活動の話をしてくれて、観光客のマナーに関しても触れた。

「国立公園に来る人たちは、欧米からの観光客と地元コロンビア人の割合が半々くらい。ごみを散らかす人は、残念ながらコロンビア人が多いの」と話す。ある時彼女が、登山道でごみを捨てた地元の人を注意したところ、「こちらは入域料を払っているんだから、ごみはあなたたちが集めればいいだろう」と開き直られたそう。

コロンビア人は環境保全の意識がまだまだ希薄なのかもしれない。一方でピクトリアのように、ボランティアたちの活動が効果をあげつつある。



ウミガメの卵がある保護柵の前に立つピクトリア

06年8月、カルタヘナにあるサン・ブエナベントウラ大学で、馬場さん、釣田さんによる第1回水環境部会が開催された。水問題を提起する全25枚の写真パネルを学生食堂に展示し、教室では大勢の聴衆を前にビデオ上映も交えて講演会を行った。スペイン語での発表も順調に進み、出席者にはとても好評だった。



展示用のパネルを手にした馬場さん(左)と釣田さん(右)

発表する機会を得た。また首都ボゴタでは3月に、ロス・アンデス大学で開催された。水を取り巻く問題は、世界各地で深刻さを増しているが、コロンビアでは日本の若者たちの活動がきっかけとなって、草の根レベルで水問題、環境問題への意識が高まり、取り組む動きが生まれ始めている。

### 活動の場を広げる水環境部会

この企画にJICAコロンビア事務所はもちろん、地元の大学関係者の賛同も得られ、水環境部会が実現することとなる。みさんと水環境部会の開催を企画。サンタ・アナ村を例に水の使い方を村から学ぶという発想のもと、写真パネルの展示や講演会を通じて、周囲の海洋汚染も含めた水問題をみんなで考えようと訴えることが目的だ。

その後もテクノロヒカ大学や、地元サンタ・アナでも発表を行った。特に「水の使い方」を村から学ぶ」という発想が意外と新鮮だったようで、彼女たちの訴えが聴衆の心を



スペイン語で授業を行う馬場さん

をとらえた。

さらに2人は、

あずまやのような風通しの良い教室

サンタ・アナ村の住民の大半は黒人で、アフリカのどこかの国に来たような錯覚を起す。村には公共設備があまり整っておらず、都市部に比べると人々の生活は質素だ。馬場さんは「物資は少ないけれど、みんな陽気で幸せそうに暮らしている」と言う。水道が完備されていないため、ためた雨水や池の水を利用し、小さいおけで少しずつ水を使う。村人が一人当たり使用する水量は、都市生活者の10分の1程度という統計もある。最近、この村の水道普及率が上がっているが、これは喜ばしい一方で、「水を無駄遣いするようになり、住民の心も変わってしまったのでは…」と馬場さんは不安を隠せない。

また、バルー島の周囲では、海洋汚染が進み、サンゴ礁が破壊されつつある。しかし島の下水はごく限られた量で、汚染の主な原因は大都市カルタヘナからの工業排水や生活排水、運河を流れてくるほかの都市からの汚水だ。村人の立場からすると、彼らは環境汚染の被害者なのかもしれない。こうした状況を見かねた馬場さんは、仲間



の隊員とともに行動を起こした。同じく環境教育の活動をするために、カルタヘナ近郊のロサリオ島に派遣されている釣田(つりた)いず

ている。バルバコア学校の母体であるマリオ・サン・ト・ドミンゴ財団は、貧困地域の人々の能力開発を目的に創設されたNGOである。住民の健康と教育を考え、バルー島の地場産業である手工芸品制作と、環境との調和を目指した支援プログラムが進められている。こうした事業の一環として、馬場さんは2005年7月にサンタ・アナ村に派遣された。カリブ海沿岸であるこの地方は、熱帯気

候のためかなり暑く、馬場さんの故郷、北海道とはまるで気候が違う。宿舎には冷房設備がなく、停電で扇風機が動かないことも日常的で、雨期には蚊が大量発生する。こうした状況で「何かつらいことは？」と聞いても、馬場さんは弱音を吐かない。彼女は学生時代に部活動で毎週のように登山をしていたとのことで、体力や忍耐強さには自信がありそうだ。

### 水資源の活用を村人から学ぶ



サンタ・アナ村では水道工事が進みつつある